

高齢社会襲来

某町で社会福祉について話し終わったら、一人の老人が寄ってこられて「七人家族だが、ふろは一番おしまいにされている。老人は汚いからというのです」と、ぐちをこぼされた。似た話はあちこちで聞かれる。

ある校長さんの家の話。老母は家のおふろに入れてもらえず、ひとりだけ銭湯行きらしい。かつて母一人子一人の暮らしを、お寺の住み込みで、やっと師範学校に入れて成長させた結果がこうである。

今様のマイホームでは子供が主人公で伸び伸びと育てられ、お年寄りも脇役で小さく暮らす。子供を人生のよきスタートにつけるためには当然と、物心を子のに集中させている。

教育の可能性は模倣もほうするということがある。子は親の後ろ姿を見て育つ。親が祖母を汚いと思えば、長じてその子は親を模倣して汚いと粗略に扱うだろう。死んだ先祖までさかのぼれとはいわない。せめて日々目の前にしている生命の本である祖父母を、

子の前で汚く扱っているのなら、とても人間の家族とはいえない。いま働き盛りの親たちはまちががなく、人類未だの高齢社会に晩年をさらさねばならない。そうになると、この人たちはわが子に一番泣かねばならないだろう。

ついでにわが家の話も。

息子が隣県に出張するので、その愛妻が特急グリーン券を買って来た。聞き知った私は階段下から二階の嫁にどなりつけた。「降りてこーい。グリーン車など生意気なつ。すぐキャンセルしてこい」。彼女はしぶしぶ駅へ向かった。後ろ姿が裏口から消えても怒りはおさまらず、だれも見えていないが、息子の湯飲みを土間にたたきつけた。飛び散った残骸は放置。

「息子たちよ、必ず到来する高齢社会はすさまじいもの。欠乏に耐える力を今から鍛えるのだ」。怒りとともにそう祈らざるをえなかった。

一晩おいて、嫁は「よく分かりました」と。

(一九八一年十一月十二日)